
ヴァイマル期からナチス期初期のブラームス像——〈モダニズム〉と〈保守・反動〉とのはざまで

石井萌加（東京大学）

本発表では、ヴァイマル期からナチス期初期のドイツにおいて、伝統的な枠組みにとらわれない音楽のあり方を志向するという意味での〈モダニズム〉の台頭と、伝統的な土台に基づくことを重視するという意味での〈保守・反動〉派の主張がせめぎ合う中で、作曲家ブラームスがどのような位置づけにあったのかを考察する。

『アンブルッフ』や『メロス』などの雑誌上で進歩主義的な言説空間が作られた一方で、それに対する保守・反動的な動きも見られたヴァイマル期は、それぞれの著述家がそれぞれの立場で、ドイツの音楽史が向かう方向を定めようとした時代であったといえる。亡くなって四半世紀ほどの時が経った当時のブラームスの位置づけは、ヴァーグナーとの党派抗争が現実味を失う中で、まさにドイツの音楽史が向かう先を示すための根拠となった。すなわちブラームスは、一方ではドイツ音楽の伝統を保持した作曲家像として評価され、他方では進歩的な作曲家の参照項となった。

従来のブラームス（受容史）研究では、何よりもまず、ブラームスをヴァーグナーと対立した作曲家として位置づけたときの評価軸が維持されてきた。シュミット（2017）がブラームスの受容史において一貫して現れる3つのイメージとして述べる「室内楽作曲家」、「古典主義者ないしは最後の古典主義者」、「アカデミック」という観点は、ヴァーグナーと対置させることによって立ち現れる、19世紀的なブラームス像に基づいている。近年、1933年のシェーンベルクの講演による進歩主義者としてのブラームス像にも注意が向けられるようになってきたが、副次的な言及にとどまっている。

発表者は、ブラームス受容史を捉える際の従来の評価軸を否定する立場ではないが、20世紀に入ってヴァーグナー対ブラームスの対立が希薄化したときの新たなブラームス像を、〈モダニズム〉対〈保守・反動〉の文脈の中に見出そうとする。美学的立場の異なる当時の主要な音楽雑誌記事や音楽史的著作物と演奏会プログラムを分析対象とし、ブラームスがドイツの過去の音楽と結びついて、もしくは当代と未来の音楽と結びついて、「誰によって」、「どのような位置づけのもとで」記述されているのかを明らかにする。〈モダニズム〉側と〈保守・反動〉側双方の立場から参照され、支持されることで揺れ動く、多層的なブラームス像を捉えることで、対象期間のブラームス受容史を、美学的闘争が凝縮された結果として示すことを目指す。

ヴァイマル期からナチス期初期のドイツにおけるブラームス像を、〈モダニズム〉と〈保守・反動〉とのはざままで形成されたものとして捉え直すことが、本発表の新しさである。その結果、ヴァイマル期の美学的な闘争が、ヴァーグナーとの対立関係に必ずしも固定化されなくなった当時のブラームス像にこそ見出されることを提示できる点が、本発表の意義である。